

義肢でハイチ支援

震災被災者の社会復帰を

ハイチ大地震で手足を失った被災者の社会復帰を支援しようと、相生市古池本町の義肢装具士、八尾直毅さん(29)が28日、現地へ向けて出発する。2年間で300人の義肢製作を目標にしており、技術者も養成して、震災復興の手助けをしたい」と話している。(茂山憲史)

隣国にセンター開設

八尾さんは、2008年3月から2年間、国際協力機構(JICA)青年海外協力隊の義肢装具士としてドミニカ共和国で活動していた。ドミニカはカリブ海のイスパニョーラ島東部。ハイチは同じ島の西部で隣国だ。

任期の終わりが近づいた今年1月12日午後5時(日本時間13日午前7時)前、ハイチ大地震が起きた。八尾さんは義肢装具について学ぶため、ハイチで活躍する米国のNGOを訪ねてミネソタ州に旅行中だった。地震には遭遇しなかったが、米国滞在中に生々しい惨状を連日のテレビ報道で見た。一緒に見た米国NGOのスタッフは、被災した現地活動拠点や仲間の様



AMDAハイチ義肢支援センター所長になった八尾直毅さん=相生市旭1丁目

相生・八尾さん AMDA現地所長に

子にショックを受けていたという。

ドミニカに戻った2月初め、大地震後のハイチで医療支援をしていた国際医療NGOのAMDA(岡山市)が八尾さんの活動を知り、協力を要請してきた。ハイチの首相は「地震で4千人が手足を失った」と発表。AMDAでも義肢支援活動を検討していた。

3月に帰国した八尾さんは、さっそく支援のプロジェクトを組み、国内の義肢製作所10カ所を回って中古部品の提供を依頼した。

AMDAハイチ義肢支援センター所長として、ハイチ国境に近いドミニカ・コメンタール市で病院の倉庫を改修し、5月にセンターを開くことにしている。期間は2年間。ハイチ人200人、ドミニカ人100人に義肢を提供する計画という。

デザインや彫刻が好きで、高校時代は芸大を目指したが、思いを遂げることができなかった。一念発起して義肢装具士の道を選んだのには、整形外科看護師をしていた母親の勧めがあった。「自分が満足する芸術より、人を助けて喜ばれる仕事」が今は気に入っている。「センターで義肢装具士は僕ひとりなので不安はあるが、JICAからAMDAへ、場所とタイミンが偶然のように重なって、今ここへ来た。運命のようです」と気を引き締めている。

寄付などの支援は、AMDA本部(0866・2844・7730)で受け付けている。